被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード縁（えにし）

教訓が、いのちを救う。

3.11 DENSHO ROAD

2024 vol.11

南三陸311メモリアル
災害を自分事として考える場に

三陸鉄道「震災学習列車」
福島大学災害ボランティアセンター
整備が進む宮古盛岡横断道路
多賀城市・末の松山
津波で町長ら職員40人が犠牲に 大槌町
ここなら笑店街　陸前高田 発酵パーク CAMOCY

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構

研究や視察、教育旅行など多彩な目的で訪れています（写真提供／南三陸町観光協会）

災害を自分事として考える場に

南三陸311メモリアル

志津川湾に面した宮城県南三陸町志津川は、町内でも東日本大震災による津波被害が特に大きかった地区です。2022年10月に震災伝承施設の南三陸311メモリアルが開館。町民の震災の体験談を通して、災害を自分事として考えてもらうことを狙いとし、来館者数は24年5月に20万人を達成しました。

南三陸311メモリアルは海抜10・8メートルに嵩上げされた土地に建設されました。設計は世界的な建築家の隈研吾さんが担当。町内産南三陸杉を利用した建物は斬新なデザインが目を引きます。観光交流施設の南三陸ポータルセンター、南三陸さんさん商店街とともに、道の駅さんさん南三陸を構成する施設の1つになっています。

多くの震災伝承施設が東日本大震災による被害の実情を視覚的に伝えている中、南三陸311メモリアルは思考の部分に力を入れています。シアター、ギャラリー、アートの3エリアで構成され、特徴的なのはシアターで実施しているラーニングプログラム。震災を体験した町民の証言を集めた映像を上映し、災害を自分事として考えてもらうきっかけの場を提供しています。

同館顧問の高橋一清さんは「3月11日午後2時46分、同じ場所にいながら生きられた人と生きられなかった人がいます。（生死を分けた）その違いは何だったのか。町民の証言を聞いて、今後の災害に備え、考えるきっかけにしてもらえれば」と願います。

24年春に新プログラム

映像のプログラムは開館当初からある「生死を分けた避難」「そのとき命が守れるか」に、24年春に「いのちを想う」が加わり、現在は3種を用意しています。既存の2種のプログラムが防災中心の内容なのに対し、新プログラムは災害からの避難、被災後の町民たちの思いや葛藤、前進という復興に重点を置いたものになっています。

高橋さんは「来館者からのニーズを受けて、新プログラムは制作されました」と説明します。今、日本や世界では津波に限らず、次々と災害が発生しています。来館者から「大切な人や家、仕事を失った被災者は、どのように前に踏み出したのですか」などと問われる機会が増え、1年かけて新プログラムは完成しました。

災害時の正解の行動は事前に分かりません。だからこそ、高橋さんは「ラーニングプログラムを体験し、考えることが大切。仲間と意見交換もしてほしいです」と呼び掛けます。

開館は午前9時～午後5時。火曜休み。入館無料。有料エリアは一般・大学生200円、小・中・高校生100円。ラーニングプログラムは60分のレギュラープログラム一般・大学生800円、中・高校生700円、小学生400円、30分のショートプログラム中学生以上400円、小学生200円。

所在地／宮城県南三陸町志津川字五日町200-1
道の駅さんさん南三陸内
TEL0226-28-9215

震災の事実を伝えるのが使命

南三陸311メモリアル顧問の高橋一清さん

「3月11日、防災対策庁舎で犠牲になった仲間たちに申し分けないという気持ちがあります。亡くなった仲間たちの無念を思い、生き残った私の使命は一人でも多くの方に東日本大震災の事実を伝え、防災意識を高めてもらうことだと考えています」

旧志津川町（現南三陸町）出身で、現在は南三陸311メモリアルの顧問を務める高橋一清さんはこう打ち明けます。

高橋さんが生まれた1960年は、旧志津川町で41人が犠牲になったチリ地震津波が発生した年。家族から津波の恐ろしさを聞いて育ったといいます。「チリ地震津波は町内でも語り継がれ、多くの町民は『地震が起きたら避難』という高い防災意識を持っていました。それでも震災で多くの犠牲者が出てしまったのは、町地域防災計画では対応できない災害が発生するという認識が不足していたため」と訴えます。

「震災について語れる人は年々減っていきます。だからこそ、町民の証言を集めて残し、伝え続けることは大切です」と高橋さん

「個は無力」を痛感

震災当時、高橋さんは南三陸町職員として観光関係の部署に所属していました。地震直後は防災対策庁舎に行きました。「その日は議会が開催されていたため、佐藤仁町長や各部署の管理職などがそろい、他の職員も続々と集まってきました」とその時の状況を振り返ります。

間もなく、目の前を流れる八幡川の水位の変化を確認するため庁舎外へ。「その行動がきっかけで、私は高台にある志津川中学校の避難所運営の業務に当たりました。それだけの違いで私は生き、防災対策庁舎に残った仲間たちはこの世にいないのです」と運命の悲哀を語ります。

志津川中学校には数百人が避難していました。停電、断水の中、避難所の運営に当たった後、高橋さんはラジオで津波被害情報を聞きますが、南三陸町の情報は全く流れてきません。高橋さんは宮城県の災害対策本部に救助を求めるため避難所を出ましたが、町内で自衛隊に遭遇。災害対策本部を立ち上げるのに最適な場所としてベイサイドアリーナを紹介しました。

3画面の大スクリーンを備えるラーニングシアター（写真提供／南三陸町観光協会）

大津波に襲われた防災対策庁舎にたどり着いたのは12日の朝。防災対策庁舎に残っていた10人の職員を救出し、その中にいた佐藤町長をベイサイドアリーナへ連れて行きました。「町長は津波にのまれて衰弱し、けがもしていましたが、関係機関の協力を得るためには災害対策本部を立ち上げられる町長の存在が必要でした」と個の無力さを痛感したと打ち明けます。

展示ギャラリーでは町民の証言を映像とパネルで紹介しています（写真提供／南三陸町観光協会）

高橋さんは震災から約2カ月間、避難所に寝泊まりして勤務。保健福祉課へ異動し、被災者生活支援業務の現場指揮を2011年12月まで行いました。

震災の発生から復興までを知る町職員として、南三陸311メモリアルの開設準備から関わることに。開館後は顧問として、想定外の災害への備えについて来館者に熱く語りかけています。

ラーニングプログラムの終わりには「明日からどのように備えていきますか？」と問いかけています。来館者に100パーセントの安全はないことを伝え、「『改めて災害リスクを自分で見直そう』という気持ちになり帰っていただきたいです」と思いを語ります。

鉄路通じて伝承に力入れる

三陸鉄道「震災学習列車」3区間で運行

岩手県の盛～久慈駅を結ぶ三陸鉄道（三鉄）は、東日本大震災の被災地を車窓から望みながら、ガイドが震災当時の様子や復旧・復興の歩みなどを紹介する貸し切り列車「震災学習列車」を運行しています。同社も震災で大きな被害を受けながら、社員一丸となって運転再開に取り組み、被災地に夢と希望を運びました。あの日を忘れず、鉄路を通じて震災伝承にも力を入れています。

「震災学習列車のお客さまの中には、三鉄に初めて乗ることを楽しみにしている方もいます」と笑顔の千代川さん

三鉄は震災時、盛～釜石駅間の南リアス線と宮古～久慈駅間の北リアス線に分かれていました。釜石～宮古駅間のJR山田線が2019年3月、三鉄に移管。これにより3路線は一本で結ばれ、総延長163キロのリアス線が誕生しました。

12年6月から田野畑～久慈駅間で震災学習列車の運行を開始。13年6月からは盛～釜石駅間で、19年6月からは鵜住居～宮古駅間でも運行しています。基本的に片道運行ですが、利用者のスケジュールに応じて3区間のどれかと時間帯を選べます。23年度は200件余りの団体利用がありました。どの区間も重要なスポットでは列車が停車か徐行をします。

乗車時間はいずれも1時間10～20分ほど。ガイドは約10人で社員が務めますが、地域の語り部に協力してもらうことも。首都圏をはじめ、同じ岩手県内でも内陸部から小中高生が修学旅行や研修旅行の一環として乗車するほか、社会人団体の利用もあります。

19年度入社で旅客営業課の千代川らんさんは主に鵜住居～宮古駅間のガイドを担当。「お客さまは震災を知らない世代や、初めて被災地に足を運んだ方が多くいる。実際に来て、見て、話を聞くことで、あの震災がどういうものだったのか体験的に理解していただいています」と話します。

乗員乗客、高台避難

山田町の旧織笠駅跡地で利用者は黙とうをします。千代川さんの出身地でもある同町は壊滅的な被害に遭いました。旧織笠駅も駅舎が流失。千代川さんは写真パネルを使いながら当時の様子を説明します。

震災時、津軽石駅に停車していた列車の運転士のエピソードも紹介します。駅員と一緒に、観光客を含む約20人の乗客を近くの小学校まで誘導し、さらに高台に避難したとき、自分たちが乗っていた列車が津波にのみ込まれる光景を見たそうです。災害時における公共交通機関の対応、そして何より、どのような場所や状況でも迅速な避難の大切さを実感させる内容です。

車内で陸中山田駅の被災の様子を説明

震災学習列車を利用した岩手県内の中学3年生からは「震災の記憶はないが、語り部の話を聴いて自分なりの考えを持つことができた。今回の話を忘れず、岩手県民として震災と向き合っていきたい」との感想が寄せられています。

震災学習列車については三鉄の公式ウェブサイトで紹介されています。今年は三鉄開業40周年を迎え、さまざまな企画もあります。千代川さんは「三鉄に乗って三陸沿岸を巡ってほしい」とPRしています。

被災者に寄り添い、支援活動

福島大学災害ボランティアセンター

福島大学災害ボランティアセンターのメンバー。左から2番目が石倉未晴さん、中央が菅野萌久さん

東日本大震災の時、避難所の運営や復興支援活動に携わった福島大学の学生有志が、2011年5月に立ち上げた「福島大学災害ボランティアセンター」。現在は現役学生と卒業生の合わせて約300人が登録し、復興公営住宅の入居者を招いたお茶会や楢葉小児童との防災学習など、活動は多岐にわたります。

福島大学では震災直後から4月30日までの1カ月余りで、約250人の被災者を受け入れ、大学職員と学生有志が中心となり避難所の運営に当たりました。この活動が原点となり、現在も支援の形を変えながらボランティア活動を続けています。

取材に伺ったのは浪江町民が入居する北沢又団地（福島市）で開かれた「福茶サロン」。住民が参加し、花見だんご作りが行われました。サロンを企画した3年生の菅野萌久さんは震災当時、小学1年生。原発事故の影響で外遊びが制限される中、県外の体験ツアーでボランティアの学生に親切にされたことが心に残り、大学入学後すぐ活動に加わりました。

「原発事故で避難を余儀なくされた際の経験や、地元に戻りたくても戻れない苦しい胸の内を話してくださる方もいます。伺った話を忘れず、私たちが大切に語り継いでいかなければいけない」と話します。

被災地支援で石川へ

2年生の石倉未晴さんは、今年3月に楢葉町で行われた「ならは防災ウォーク」に参加。防災士同行の下、子どもたちと一緒に町内の津之神社から楢葉小学校まで約2・5キロの道のりを歩き、今津波が来たらどこに逃げればよいのか考えたり、障害物をがれきに見立て、災害時の安全な歩き方を学んだりしました。

「復興が目に見えて進む中、震災を風化させず子どもたちに伝えていくことが大切。私自身も防災について学ぶことができ、良い経験になりました」と振り返ります。

今年1月1日に発生した能登半島地震の被災地支援にも関わり、菅野さんも発生から2カ月後、石川県七尾市を訪れて家屋の片付けを手伝いました。「がれき処理も不十分で、復旧には長い時間がかかると感じました」と表情を曇らせます。

「『悲しいとかつらいという感情はなく、ただ目の前のことで精いっぱい』という言葉が強く心に残りました。福島と石川で支援の形は違いますが、必要としてくれる方がいる限り活動を続けていきたい」と力を込めます。

浪江町民が入居する北沢又団地で開いた「福茶サロン」。だんご作りを楽しみ、交流を深めました

整備が進む宮古盛岡横断道路

安全、スピーディーに結ぶ

宮古市にある国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所（石井真吾所長）は、国道45号山田町～洋野町および三陸沿岸道路の山田南～階上インターチェンジ（ＩＣ）の管理の他、国道１０６号宮古盛岡横断道路の整備事業にも携わっています。国道１０６号は宮古市と盛岡市を結ぶ重要ルート。しかし北上山地を横断するため勾配やカーブが多く、気象の影響を受けやすいのが課題でした。復興支援道路として宮古盛岡横断道路を整備したことで移動時間が短縮でき、東北自動車道と三陸沿岸道路の接続など、連係強化が期待されます。

宮古盛岡横断道路の中で三陸国道事務所が整備に携わった道路の一つ「宮古箱石道路」（宮古市蟇目地区）

地域高規格道路

国道１０６号は総延長１３７・１キロ。川に沿うようにカーブが多く、山を登るにつれて急勾配も増え、特に区界峠付近は標高６００メートルを超えて冬場の気温はマイナス20度前後に冷え込み、積雪や凍結など劣悪な道路環境となるため、安全走行の面で支障を来していました。生活道路としてはもちろん、物流や救急医療など国道１０６号の役割は大きいだけに早期の整備を求める声が、かなり前からありました。

宮古盛岡横断道路は盛岡側や宮古側の両端など、一部区間は東日本大震災前から事業化されましたが、復興支援道路として震災後に急ピッチで工事が進められました。国道１０６号の道路環境の悪い区間を別線の地域高規格道路として整備。同国道は本来、岩手県管理ですが、大部分の区間を権限代行事業として国が整備しています。

このうち三陸国道事務所は区界峠を宮古市側に降りてきた箱石地区から東側の国の工事を担当しました。２０１１年度に事業化された宮古箱石道路の３区間計16キロと三陸沿岸道路宮古中央ジャンクション（ＪＣＴ）～宮古港ＩＣ間の４キロを整備。いずれの区間も21年３月までに開通しました。

三陸国道事務所は「被災地域でさまざまな復興工事が進む中、全国から応援をもらい、新たな道を通すことができた」と振り返ります。

防災面で整備継続

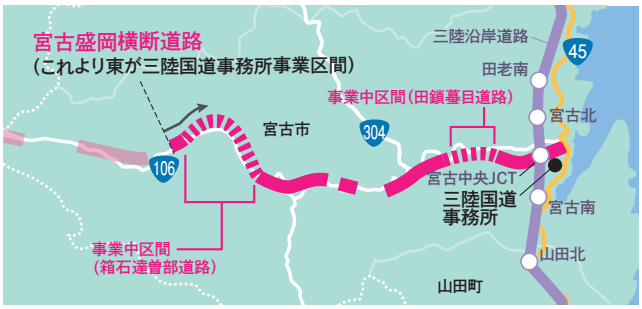
これにより宮古盛岡横断道路は計66キロが、すでに通行できます。復興支援道路としての整備は10年で終了。以前に比べれば格段に走りやすくなりましたが、16年８月の台風10号の上陸で岩泉町を中心に宮古地域は甚大な被害を受けました。

国道１０６号も宮古市内で道路決壊による全面通行止めが最長11日間続き、沿線の一部集落が数日間孤立したほか、全面通行止め解除後も片側通行規制が継続し、本復旧まで２年半かかりました。当時は通常、宮古市と盛岡市の各市役所間を約１１０分で結んでいましたが、釜石自動車道経由の迂回で約２１０分となりました。

防災機能を併せた道路として宮古盛岡横断道路の整備が継続。20年度に田鎖蟇目道路（７・２キロ）が、21年度に箱石達曽部道路（９・７キロ）が事業化されました。どちらも宮古市内にあり、田鎖蟇目道路は昨年末に起工式が行われました。

二つの道路が完成した場合、宮古市と盛岡市の各市役所間

橋とトンネルの連続 三陸道の管理も重要



を約80分で結びます。宮古地域には3次救急医療施設がないため、脳梗塞などの重篤患者は盛岡市内の病院に搬送しますが、移動時間の短縮が図られ、救命率の向上につながります。

鮮度が勝負の水産物をはじめ、物流の速達効果も大。東北自動車道と三陸沿岸道路を結ぶ横軸として、釜石自動車道と併せて選択肢が増えます。宮古に寄港した大型クルーズ船の乗客が周遊観光として盛岡さんさ踊りの見物や雫石町に足を延ばしたケースもありますが、これまで以上に観光の広がりが期待されます。

2カ所でフルIC化へ

三陸国道事務所は三陸沿岸道路の山田南～階上IC間139・4キロの管理を担当しています。この区間の大半は北山崎や鵜の巣断崖といった景勝地に代表されるように、北上山地の山々が三陸海岸に迫る急峻な地形が特徴。いくつもの長いトンネルや高さのある橋りょうを設け、山々の中腹部分を三陸沿岸道路が貫いています。

夏はやませの影響で速度規制がかかることも。冬は比較的降雪は少ないですが、南岸低気圧が発達した場合は沿岸部に大雪を降らせることもあります。「構造物が多く、高切土や高盛土のため、のり面の対応など管理の難しさがある」と三陸国道事務所。

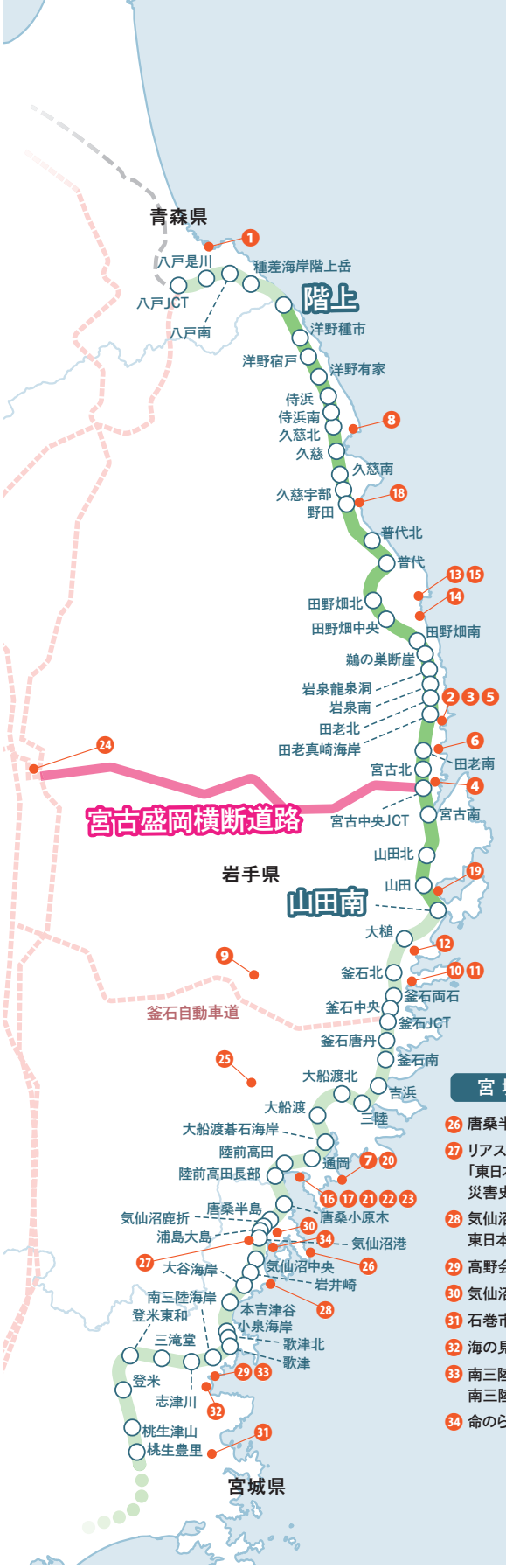
田野畑村にある思惟花笑み（しいのはなえ）大橋は延長394メートルですが、谷底から路面まで約130メートルの高さがあり、同事務所の管理区間では代表的な構造物。建設時の苦労がしのばれます。

完成後の管理面でも地形的な難しさはありますが、三陸沿岸道路が全通したことで、かつて「陸の孤島」と呼ばれ、首都圏はもちろん県都・盛岡市さえ遠かった北三陸地域の道路交通の便は飛躍的に向上。交流人口の拡大にもつながっています。

国道45号「思惟大橋」の右側に架かる三陸道の真新しい「思惟花笑み大橋」

21年度には三陸沿岸道路、釜石自動車道、宮古盛岡横断道路の沿線19市町村と国、青森県、岩手県で構成する「三陸沿岸道路等利活用懇談会」が設置されました。関係者が広域連携の取り組みを推進しています。現在ハーフICの山田北は新たに宮古方面と、洋野種市は仙台方面に出入りできるようにする事業も始まるなど、ニーズに応じた改良も行っています。

三陸国道事務所は「沿線自治体の声を聴き、より良い道路整備に反映させていきたい」としています。



震災伝承施設 第3分類

青森

1. 八戸市みなと体験学習館

岩手

2. 津波遺構たろう観光ホテル
3. たろう潮里ステーション
4. 宮古市市民交流センター防災プラザ
5. 田老防潮堤
6. 震災メモリアルパーク中の浜
7. 大船渡市立博物館
8. 久慈地下水族科学館もぐらんびあ
9. 3.11東日本大震災遠野市後方支援資料館
10. 釜石祈りのパーク
11. いのちをつなぐ未来館
12. 大槌町文化交流センターおしゃっち
13. 震災遺構明戸海岸防潮堤
14. 島越ふれあい公園
15. 羅賀ふれあい公園
16. 東日本大震災津波伝承館（愛称：いわてTSUNAMIメモリアル）
17. 高田松原津波復興祈念公園
18. 野田村復興展示室
19. 山田町まちなか交流センター
20. 大船渡市魚市場
21. 陸前高田市立博物館
22. タピック45（旧道の駅高田松原）
23. 気仙中学校
24. 岩手県立図書館「I-ルーム」
25. 仕事と学び複合施設「イコウェルすみた」展示棟

宮城

26. 唐桑半島ビジターセンター
27. リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示
28. 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館
29. 高野会館
30. 気仙沼市復興祈念公園
31. 石巻市震災遺構大川小学校
32. 海の見える命の森
33. 南三陸町東日本大震災伝承館南三陸311メモリアル
34. 命のらせん階段（旧阿部家住宅）

※2024年6月2日現在

津波から住民らが避難

多賀城市・末の松山

多賀城市にある歌枕ゆかりの地「末の松山」。約1000年前の貞観地震の津波も届かなかったとされ「大きな津波も、末の松山は越えられない」とのいわれから「ありえないこと」を表す歌枕として古来、恋愛の和歌に詠み込まれてきました。東日本大震災でも津波から逃れるため、多くの住民がこの地に避難しました。

平安時代から都にもその名を知られていた「末の松山」。

三十六歌仙の一人で清少納言の父としても知られる清原元輔ら多くの歌人に歌枕として詠み込まれてきました。現地には古今和歌集収録の東歌「君をおきて　あだし心を　わがもたば　すゑの松山　波もこえなむ（あなたを差しおいて、他の人に心を移すようなことがもしあったとしたら、波が越えるはずがないといわれている末の松山さえ、波が越すことでしょう）」の歌碑が立っています。

樹齢約490年とされる黒松が残る国名勝「末の松山」。すぐ裏手に「寶國寺」があります

すぐ裏手にある「末松山」を山号に掲げる古刹「寶國寺」によると、東日本大震災の津波は末の松山までは届かなかったものの同寺の本堂や庫裏のすぐ前まで到達。同寺やすぐ近くの不磷寺には多くの住民が避難し、寶國寺だけで約100人もの住民たちを受け入れました。

津波被災の状況後世に

震災の津波では多賀城の市域の3分の1が浸水。JR多賀城駅南口に「多賀城市東日本大震災モニュメント」とともに設置された津波浸水区域図を見ると、末の松山のある八幡地区も広い区域が津波の被害を受けたことが分かります。

全国で唯一「災害科学科」のある宮城県多賀城高校の生徒たちは震災翌年から市内の津波の痕跡を調べ、その高さを割り出して付近の電柱に「津波波高標識（津波標識）」を設置してきました。この標識や末の松山、多賀城市東日本大震災モニュメントを生徒たちが語り部としてガイドする「まち歩き」も毎年継続。末の松山に避難し命を救われた住民らのエピソードなども紹介しています。

末の松山を訪れる観光客らのためにトイレとともに整備された市営駐車場の前にある電柱でも、多賀城高校の生徒が設置した「津波波高標識」を見ることができます

震災伝承施設「多賀城市東日本大震災モニュメント」。中央の柱は、このほど国宝に指定されることが決まった多賀城碑の覆屋（おおいや）の格子をイメージしています

●末の松山　宮城県多賀城市八幡2-8-28
※駐車場 多賀城市八幡2-21
●多賀城市東日本大震災モニュメント
宮城県多賀城市中央2-7　多賀城駅前公園

※多賀城高校の2024年度「まち歩き」の申し込みなど詳細は以下QRから

「忘れない 伝える 備える」

津波で町長ら職員40人が犠牲に　大槌町

東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町。当時の町長をはじめ役場の課長級職員ら40人が津波にのみ込まれ、行政機能がまひするという未曽有の事態に陥りました。平野公三町長は当時、職員を代表して新しい町長が選任されるまで町のかじを担い、その後も幹部職員として第一線に立ち続けました。震災から13年が過ぎ、町長を務める今だからこその気付きがあるそうです。

大槌川に架かる橋として震災後、新たに誕生した源水大橋の開通式（2016年3月）

お話を伺った方
平野公三町長

大槌町は震災の津波が吉里吉里港東側で最大22・2メートルを記録。住宅地・市街地面積の52％に当たる4平方キロが浸水しました。2019年6月現在で人的被害は死者818人（関連死52人を含む）、行方不明者416人、家屋被害も全壊と半壊を合わせて4167棟、一部損壊は208棟を数えました。

津波は役場庁舎2階まで襲い、屋上への避難が間に合わなかった町長ら職員が犠牲となりました。町は機能不全に陥り、地理的な要因もあって町の被害概要は外部に伝わりにくく、孤立した状態が続きました。当時、総務課主幹だった平野町長は震災翌月に総務課長となり、6月から新たな町長が決まる8月まで町長職務代理者に。その後は総務部長兼総務課長、会計管理者を務めて退職し、15年8月に町長に就任しました。

「多くの仲間を失ってからのスタートだった」と平野町長。当時は町長がいないため、本来なら専決処分とすべき案件でも、何度も臨時議会を開催。

震災直後、町の対策本部の様子

「あの頃はきつかったの一言だが、今振り返れば非常事態だったとつくづく思う」と振り返り、「職員、町長職務代理者、町長と、その時の立場で震災とその後の復旧・復興に対する目線が異なる。町長になってからは一段と高くなった」と語ります。

能登半島地震の被災自治体の職員たちにも思いをはせます。「疲弊していることだろう。心のケアや休息が必要」と気遣いつつ、「私たちがやってきたことを押し付けてはならない」と強調します。その自治体が何を考え、何をしたいのかを踏まえ、「支援を考えるのが大切。復旧・復興は似たように進むが、自治体によって背景が異なる。どのような道を歩みたいのか、その思いに寄り添いたい」と話します。

「変化を遂げる」

そこには平野町長自身、「高齢化が進み、人口も減っていく中で、大槌町は被災自治体としてどのようなまちづくりを進めるべきか、もっと積極的に打ち出すべきだった」との思いがあります。「変化する」ではなく「変化を遂げる」という強いメッセージの必要性も実感しています。

大槌町では、かさ上げや防潮堤、住宅、産業などハード面の整備はおおむね終了し、若者を取り込んだ新しい文化を発信する町を目指しています。小中一貫校、県立大槌高校の魅力化に向け積極的に県と連携しています。「小中高生や今も町に残る若者は地元への思いが強い。18歳までの学びを保障する町でありたい」と平野町長。「若者が町に元気を与えているとともに、震災伝承の面でも期待が懸かる」と言います。

役場職員も入れ替わり、震災を知らない世代が増えています。「忘れない 伝える 備える」をコンセプトに、文章や映像などでアーカイブを作る必要性を訴え、「記録に残すには、ここ5、6年が勝負」と言います。「震災伝承の根底は人の命を守ること。それぞれの自治体が特徴を生かしつつ、横のつながりでできればいい。点から線へ、そして面へ。震災伝承をベースにした交流拡大にもつながれば」と期待を込めます。

仮設店舗を経て開業 笑顔生む憩いの場

ここなら笑店街

福島第一原発事故の影響で約4年半の間、全町避難を経験した福島県楢葉町は避難指示解除後、役場に近い国道6号沿いに、生活機能を集約したコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」を整備しました。敷地内にある商業施設「ここなら笑店街」は地域住民にとって、なくてはならない場所となっています。

中庭にはテーブルといすを置き、買い物客が一息付ける場となっています

2018年6月にオープンした「ここなら笑店街」には、震災以前から楢葉町で営業していたスーパーやホームセンター、ベーカリーをはじめ、新たに開業した居酒屋や理容室など12店舗が入居し、町民の生活を支えています。

掲げるテーマは「みんなが笑顔になれる場所」。餅つき大会やビアガーデンなどを開き、住民らが顔を合わせ交流できるイベントを企画しています。

同施設の管理業務を請け負う一般社団法人「ならはみらい」事務局の伊藤紘輝さんは楢葉町生まれ。高校2年生のときに被災し、いわき市などで避難生活を送った後、他県の大学に進学しましたが、卒業後にUターン。町民の生活再建のサポートや移住支援などを行う同法人に就職しました。

「月に1度会合を開き、テナントさんと意見交換を行っています。イベント開催には皆さんの協力が不可欠。ここを起点に町のにぎわいを創出できれば」と話します。

「新春餅つき大会」には幅広い世代の町民が集まり、盛り上がりました

作業員にそばを提供

原発事故の影響で住民が町を離れていた間、除染作業やがれき処理で町を訪れていた作業員が、昼食や日用品を買える店がありませんでした。そのため町では、役場駐車場に「ここなら笑店街」の前身となる仮設店舗「ここなら商店街」を整備。飲食店「おらほ亭」と「武ちゃん食堂」、スーパー「ブイチェーン」が入居し、14年から4年間営業しました。

「食楽処（どころ）おらほや（旧おらほ亭）」店主の横田峰男さんは、富岡町にあった店が被災。出身地である楢葉町の力になればと「ここなら商店街」への入居を快諾。休憩時間が限られる人たちのため、手早く作れるそばを提供しました。

「仕事で疲れた人たちがほっと一息付ける場になればと思い、もうけは考えていませんでした。物を売るというより、親切を売っていた感じかな」とほほ笑みます。

現在の「ここなら笑店街」開業後、毎月11日の月命日には、犠牲者への追悼と復興の願いを込めたキャンドルナイトが欠かさず行われています。今年3月には隣接する複合施設「みんなの交流館 ならはCANvas」で、震災に関する絵本の読み聞かせや、昔の町の姿を展示した写真展も行われました。

クリスマスイルミネーション点灯式ではゴスペルライブを行いました

「震災の記憶を風化させることなく、次世代の子どもたちへつないでいきたい」と伊藤さんは話します。

所在地／福島県楢葉町大字北田字中満256
TEL0240-23-6771（ならはみらい）

陸前高田市・楢葉町の震災伝承施設

第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮した施設）、第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）のみ掲載。

楢葉町 第3分類●みんなの交流館 ならはCANvas 楢葉町大字北田字中満260 ●National Training Center Jヴィレッジ 楢葉町山田岡字美シ森8
第2分類●津波防災対策ビューポイント“みるーる天神” 楢葉町大字北田字上ノ原地内

現代に合った醸造文化 若者の雇用、定着にも

陸前高田 発酵パーク CAMOCY

「陸前高田 発酵パーク CAMOCY（カモシー）」は「醸し」をテーマにした飲食型の商業施設。岩手県陸前高田市は古くから醸造文化が息づいた地域でもありました。みそ、しょうゆはもちろん、パンや地ビール、チョコレートなども同市の新たな発酵品として、CAMOCYでの提供のみならず、広く国内、海外へ発信しています。

ガラス張りで外から工房の様子が見学できます

CAMOCYは陸前高田市中心部近くの気仙川西側の今泉地区にあります。かつては歴史的な町並みで、みそやしょうゆなどの醸造元が点在していましたが、東日本大震災の津波で破壊されました。

CAMOCYの計画時から主導的に関わってきた取締役の河野通洋（こうのみちひろ）さんは、1807年創業の元々は日本酒の蔵元で戦後、みそ、しょうゆに転換した八木澤商店の9代目社長。「今泉地区はきれいな地下水が湧き出る場所で、醸造文化が育まれた」と語ります。震災で自社の本社機能や工場を一関市に移しましたが、翌年には陸前高田市に戻り本社・店舗を再開させました。

既存の産業の復活だけではなく新たなものも生み出し、若者の雇用や定着を図るにはどうしたらよいのか。そこでテーマに上ったのが「醸し」です。かさ上げ工事の完了が見えてきた段階で河野さんは賛同する仲間に声をかけ、2020年12月にCAMOCYがオープンしました。

木のぬくもりが感じられる落ち着いた店内

窓越しに工房を見学

施設には発酵食品を用いた食堂、弁当・総菜店、ふっくら出来たてパンの工房、世界中の発酵食品の販売ショップ、オーガニックのカカオを素材にしたチョコレートの店、クラフトビール醸造所の他、再生可能エネルギーに取り組む事業所の7店が入ります。ここでしか食べられないメニューもあります。

みそ、しょうゆにちなんだ商品だけでなくパンなども販売

地域資源の循環を図ろうと建物や施設内のテーブル、いすなどは地元の間伐材を活用。ロッジ風テラスもあり、施設全体が木のぬくもりを感じさせます。パンやクラフトビールなどは工房を併設し、製造の様子を窓越しやカウンターから見学できます。

平屋建てで建物面積は約168坪と大きな施設ではありませんが、「小さくても持続可能な発酵パークに」と河野さん。ちょうどコロナ禍でのオープンで「誰が来るんだ」という声もあったそうですが、観光客はもちろん市民も足を運び、年間約13万人が来場します。

河野さんは「市内の人口減少が進んでいるが、むしろ1人当たりの地域資源は高まる。無理に大きくしなくても持続可能なまちはつくれる。それをCAMOCYで実証していきたい」と意欲満々。全国発酵食品サミットの陸前高田市誘致も目指しています。

所在地／岩手県陸前高田市気仙町字町308-5
TEL080-2345-5162（発酵食堂やぎさわ）

陸前高田市 第3分類●**東日本大震災津波伝承館（愛称:いわてTSUNAMIメモリアル）** 陸前高田市気仙町字土手影180 ●**高田松原津波復興祈念公園** 陸前高田市高田町および気仙町地内 ●**陸前高田市立博物館** 陸前高田市高田町字並杉300-1 ●**タピック45（旧道の駅高田松原）** 陸前高田市高田町字古川28-5 ●**気仙中学校** 陸前高田市気仙町字小渕202
第2分類●**3.11希望の灯（あか）り** 陸前高田市小友町字茗荷1-237 ●**ハナミズキのみち** 陸前高田市高田町字曲松地内 ●**二度と散らないねがい桜** 陸前高田市米崎町字地竹沢181 普門寺 ●**陸前高田市東日本大震災追悼施設** 陸前高田市高田町字並杉300-1 ●**震災伝承看板「救援ルートを切り啓（ひら）いた「くしの歯作戦」（陸前高田市）」** 陸前高田市高田町字曲松地内 ●**3.11仮設住宅体験館** 陸前高田市米崎町字神田113-10

Topics & Information

第5回伝承ロードアドバイザリー委員会を開催しました

研修会参加者のアンケート結果報告、高い満足度維持

第5回伝承ロードアドバイザリー委員会（委員長＝東北大学災害科学国際研究所・佐藤翔輔准教授）が5月14日、ハーネル仙台で開催しました。委員会では2023年度に当機構が企画・運営した3.11伝承ロード研修会の実施内容や参加者アンケートの分析結果について報告し、議論をいただきました。

研修会の実施状況では、22年度との比較で実施回数が23回から32回、参加人数が407人から730人に増加。活用した震災伝承施設は44施設と22年度とほぼ同様で、研修期間は32回中17回が1泊2日で実施しており、平均期間が1.6日と22年度の1.3日から伸びました。

アンケート結果からは、参加者の満足度（「とても良かったの割合」）は23年度の参加者数が増加しても、22年度とほぼ同様の82%を維持しました。

委員の皆さまからは「研修会に初めて参加した方が興味を持った点などを把握すると今後の研修企画の参考になる」「震災をよく知らない20代の参加者が比較的多いので、そこをターゲットにした意見などの分析もあると面白い」「各施設の印象や感想など参加者の声が分かるので、訪問施設への情報提供を検討してほしい」といった意見がありました。

委員会の開催状況

表紙

被災地を歩く

震災の記憶や教訓、次代へ継承

南相馬市メモリアルパーク（南相馬市）

南相馬市メモリアルパークは第2分類の震災伝承施設。「震災の記憶を未来へつなぐ」をコンセプトに、「震災の記憶を後世に伝承していく場所」「鎮魂および慰霊の場として海を眺めることができる高台」として原町区の北泉海浜総合公園に隣接し、以前住宅があった場所に盛り土して整備し、2021年4月に完成した。

メモリアルパークの高さは約10㍍。津波が発生した場合の緊急避難経路としての機能があり、階段の他に車いすでも上れる通路がある。それ以上の津波が予想される場合、さらに高台の公園へ通じる通路も確保している。

園内には東日本大震災復興のモニュメントと記銘碑を設置。モニュメントはステンレス製の双三角錐で、南相馬市の鹿島区、原町区、小高区の絆を表した。下部は震災から今日までの復旧・復興を、上部は豊かな自然が映り込むことで南相馬市の未来を創造する力強さを表現。三角錐の間には震災時の津波の高さ11.1㍍が記されている。震災による市内の被災状況を説明した看板もある。

記銘碑には犠牲になった807人の名前が刻まれている。碑文の最後に記された「やり場のない悲しみは、今なお癒えることはありません。犠牲になられた方々を偲び、復興への決意を新たにするとともに、震災の記憶や教訓を次世代へ継承していくことを誓い、この碑に犠牲者の御芳名を期します。」の文は、あらためて震災のむごさを思い起こさせてくれるとともに、未来へ語り継ぐ大切さを気付かせてくれる。

隣接の北泉海浜総合公園も震災前は松林に囲まれたきれいな場所だったが、津波に襲われて全て流されてしまい、新たに整備された。公園に吹き込む潮風は、震災の前も後も変わることがない。この地区が一年のうちで最も光輝く夏が、もうすぐやって来る。

所在地／福島県南相馬市原町区北泉字地蔵堂地内

伝承ロード縁　2024年6月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー
記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271
無料